

がようやく終わるような気がいたします。

## 満蒙開拓の夢とシベリア抑留

香川県 新開 正

私は大正十二（一九二三）年一月十七日、香川県大川郡鶴羽村岡之端の漁師、新開安蔵・トキの長男として生まれ、次男要、三男盛の五大家族でした。家業は漁業ですが農業も自家消費程度の耕作もしていました。父母とも健康で働き者でした。私も父母の手助けをして頑張りました。

私が小学校五年生のころ、大陸が騒がしくなり、私の村からも多くの人たちが出征して征かれました。私の部落からも応召者が出て、その人達の武運長久を祈るため村の神社へ小学生と高等科生と二手に分かれて日参したものでした。

鶴羽尋常高等小学校を昭和十二（一九三七）年春に卒業した年の七月、支那事変が勃発して我が丸亀連隊にも動員令が下り、足立部隊として大陸での敵前上陸に参加して、村からも多くの兵隊さ

んが戦死されました。そのことを終始目にしてるので、いづれ私も、矢張りお国のために出征しなければということは、覚悟しておりました。

私は小学校卒業後、家業を手伝っていましたが、当時周囲は戦時色で、私も海軍を志願しようかなと思ひ、迷っていました。

丁度そのころ、満蒙開拓が叫ばれていまして、私も農業が好きだったので満蒙開拓にも心が引かれていきました。父母は猛反対したのですが、私の熱意に負けて、長男である私の満蒙開拓団行きを許してくれました。

早速、志願して昭和十四年一月、故郷を後にして、茨城県内原にある満蒙開拓青少年義勇軍に入所しました。

香川県、新潟県など六県から来た十六歳から十八歳までの人の混成で、一個中隊三百人が三月月の基礎訓練を受けて昭和十四年四月、内原を出発、新潟で船に乗り、四月八日大連に上陸しました。

初めて見る広大な大陸にただただ目を見はるばかりでした。

りでした。

最初は奉天省昌図にある特別訓練所に入りました。兵舎は張作林の注文で三井物産が建てたそうで、とても大きな建物で、半分は満州国軍が使用していました。私達の七個中隊二千百人が内地から行つたのですが、既に三個中隊が入所していました。そこで半年間訓練を受けてから北安省鉄驪に移動したのが昭和十四年の秋でした。続いて昭和十五年春には西北滿の最終入植地であるノモンハンに近い内蒙古の牙克石<sup>ヤクケン</sup>へ移動し、ここを永住の地と定めて耕作一途に励みました。

そこには既に第一次先遣隊が入っていて、小屋掛けの粗末な家に入って野菜を作っていました。

香川、熊本、群馬などの六県から来た人達でした。

私達は第二次隊として入植したのですが、当時は匪賊が出没して治安が悪いので、日本軍から払い下げの三八式歩兵銃が支給されました。

昭和十五年秋の収穫も終わり、十五県から編成された本隊を暮れに迎え入れたのです。義勇軍は

軍隊と違つて同期生が一兵舎に住み、名前は呼び捨てで、初年兵が古参兵にいじめられる軍隊の内務班のようなことはありませんでした。

昭和十六年、関東軍特別大演習の時には第六軍支援隊として、ラクダ一頭に一台の輸送車を引かせ、三頭のラクダを一人が指揮する輸送隊に徴用せられ、半年間勤めさせられました。

私達の入植した牙克石の後方には、関東軍第六軍の第二五四連隊（第百十九師団）の陣地が在りました。

いざ対ソ戦となれば、軍隊より先に我々が戦火を浴びることになるのですが、当時は、そんなことを考えたことはありませんでした。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が始まりました。昭和十七年春には第六軍の徴用が解除になり、開拓団も春蒔きをすませました。

昭和十八年の春、ハイラルの第六軍司令部で徴兵検査を受け甲種合格になりました。

昭和十九年一月三十一日、ハイラル第五地区第

七〇〇部隊（第八国境守備隊）に現地入隊しました。

同年八月ごろ、関東軍南方転出のため陣地守備より一転編成替えとなり、第一一九師団第二五五連隊となりました。

私は一期の検閲が終わつて下士官集合教育を三カ月受けて原隊復帰したところ、古参兵が南方に転出していたので第二五五連隊第二大隊第四中隊の擲弾筒分隊長となりました。

陣地を興安嶺に構築することになり、岩山を掘り抜く作業を一昼夜三交代で勤めました。

八月九日、夜中の十二時に掘削作業が終わつて幕舎に帰つてきたら、ハイラルの原隊に朝鮮の兵隊が入隊したから、その兵隊を連れに行けと命ぜられました。

私等の陣地は満州里とハルピン間を走る国際鉄道（私はそう呼んでいました）のトンネルの真上にありました。その時は、既にソ連軍が侵入してきていたのですが、我が部隊は知らなかったの

です。

私はハイラルに行くのに国際列車が待てども来ないので、隊長に「汽車が来ないのでどうしますか」と聞きますと、「自動車隊がちょうど来ているから、それに頼んで乗せてもらえ」と言われました。

原隊から陣地構築作業に来る時は小銃は持って来ましたが、実包は持たずに来ましたので、私は徒手帯剣の姿で自動車隊に行き便乗させてもらいました。一時間走ったらハイラル方面から邦人がどんどん避難してくるのに出会いました。

原隊のある牙克石方面から戦車が後退してきましたが、牙克石の街が見える丘の手前で止まりましたので、自動車隊（十両）の指揮官の大尉に今後の私の行動について指示を求めましたところ、私の服装に「何んたる服装か！」と叱られました。しかし「後退するから同乗せい」と言われ陣地の作業隊に戻ってきました。早速、陣地に入りましたら翌日ソ連の自走砲がやってきました。砲身が

四メートルもある口径一五センチの巨大砲を乗せた戦車でびっくりしました。

我が陣地は以前、国境監視隊がいた半地下式のもので、丘の頂上に在り、眼前には国境に通ずる一本道が延びておりました。昨日乗せてもらった自動車隊を目掛けて、ソ連の自走砲が一発発射しましたら百発百中で、自動車隊は全滅しました。しかし弾丸は破裂せずに貫通しただけだったので、弾丸は撤甲弾だったと思います。

そのうち大隊本部から軍役が出て来て行き、しばらくしたら白旗を掲げたソ連のジープが着き本部の中に入って行きました。ジープの運転手がガソリンを抜いて水で薄めて飲んでいたので驚きました。

十七日に本部から「兵器場行の上、三十キロ後方の博巴<sup>フバ</sup>図<sup>ト</sup>に集合せよ」の命令がありました。

原隊では通信隊長指揮の下、遊撃拠点である笹山で八百人がソ連と交戦しましたが、わずか五人が生還したのみで全滅したそうです。

昭和二十年九月二十日、博巴凶を出発、食糧携行、九月二十七日にバイカル湖西方のクラスノスカヤに到着しました。そこで下車しましたが野原の真中で、建物はなく、徒歩行軍五キロでやっと収容所に到着、第六分所の地上建物に千五百人が収容されました。

第三大隊長の皆川少佐が隊長になりました。翌日から早速、炭坑で石炭掘りが始まりました。「働かざる者は食うべからず」の国である。炭坑が三つあって昼夜三交代の労働で、携行した日本軍の糧秣があるうちは給食も良かったのですが、それがなくなつてからは地獄が始まりました。

昭和二十年の冬から同二十一年の春まで、馴れぬ炭坑作業の疲労に加えてソ連給与の劣悪（一日の食糧、黒パン一片と塩水スープ）、加えて急激な寒さの零下三〇〜四〇度が加わり、体力は激減し死亡者が続出、二〇パーセントの兵士が死亡しました。

身体検査は尻の肉をソ連の女医がつまんで、皮

の張り具合で労働の可否を判断して、一級、二級は重労働、三級は普通の労働、それ以下はオカ（OK）と称する栄養失調症で休養させる制度でありました。

仲間の一人がオカになったので、私が背負つて病棟に運んだのですが、背の高い大柄な兵隊でしたが、余りのその軽さにビックリしました。その兵隊は間もなく亡くなりました。

あまりの食糧難に、各自持参の品物とパンの交換が始まり、現地人も貧弱な生活でしたが、衣料品が不足しているようなので、軍隊の三角巾を黒パン一キロと交換して腹の足しにしてみました。タバコを吸う者は特に辛かったようで、松葉を紙に巻いて吸っていました。「マホルカ」は現地人のタバコで、甘い香りは空腹の日本兵にはたまらない思いをさせたものでした。マホルカを巻く紙には特に苦労したようで、たまに配布される「日本新聞」は記事よりもマホルカ用に珍重されたようです。

私は食料不足がひどい時には、帯革の皮を焼いて食べた記憶が、六十年すぎた今でもはっきり残っております。

冬の寒さは格別で、空気が凍ってキラキラする時はマローズといって屋外労働は中止になりましたが、炭坑はその点、寒さの苦しみはありませんでした。

炭坑は酸素が薄いのもですからアチコチに坑口があり、石炭の掘削、炭車への石炭の積み込み、炭車の運搬が日本兵の仕事でした。

入ソしてから一年半になりましたら給養も改善され、ノルマの達成率によってはわずかながら金銭がもらえるようになり、タバコぐらいは買えるようになりました。売店も出来て、身体の丈夫な者は物を買うようになりました。その中、日本向けのハガキが支給になり、「カナ」で書くように言われました。収容所の生活も落ち着いて死亡者も減り、炭坑の事故死も落盤とかトロッコに挟まれて死ぬとかはありませんが、だんだん少なくな

ってきました。

昭和二十三年九月二十日、クラスノスカヤの近くのサジヨルナヤを出発、待ちに待った「トーキョーダモイ」です。ナホトカで「朝嵐丸」に乗船、舞鶴に上陸、懐かしの我が家に帰ったのは昭和二十三年十月十七日でした。

顧みれば昭和十四年一月、内原訓練所に入所以来、実に九年九カ月振りの我が家でした。幸い父母とも健在でありました。私は長男でしたので家業の漁業を継ぎ、現在に至っています。

なおシベリヤで亡くなった戦友の遺骨は、全部三年間かけて内地に持ち帰り、東京の千鳥ヶ淵の墓園に奉納しました。

現地のロシア人が墓標をお守りしてくれたお陰で氏名も判明したので、抑留されて氏名がはっきりした遺骨を故国に届けられたことは他に例のないことと誇りに思っております。